



日本現代文學全集・講談社版 63

野上彌生子 集 宮本百合子

編集
伊藤 整
龜井 勝一郎
中村 光夫
平野 謙吉
山本 健吉

日本現代文學全集

63

野上彌生子・宮本百合子集

編 集

伊 藤 整
龜 井 勝 一 郎
中 村 光 夫
平 野 謙
山 本 健 吉



昭和40年2月10日 印刷
昭和40年2月19日 發行

定 價 500圓

© KODANSHA 1965

著 者
の が み や え こ
野 上 彌 生 子
み や も と ゆ り こ
宮 本 百 合 子

發 行 者 野 間 省 一

印 刷 者 北 島 織 衛

發 行 所 株式會社 講 談 社

東京都文京區音羽町3〜19
電話東京 (942) 1111 (大代表)
振 替 東 京 3 9 3 0

印 刷 大 日 本 印 刷 株 式 會 社
寫 眞 株 式 會 社 興 陽 社
版 印 株 式 會 社 和 田 製 本 工 業 株 式 會 社
製 製 本 岡 山 紙 器 所
製 兩 株 式 會 社 第 一 紙 藝 社
背 厚 川 株 式 會 社
表 紙 ク ロ ス 日 本 ク ロ ス 工 業 株 式 會 社
口 箱 用 紙 日 本 加 工 製 紙 株 式 會 社
本 文 用 紙 本 州 製 紙 株 式 會 社
函 貼 用 紙 安 倍 川 工 業 株 式 會 社
見 返 し 用 紙 三 菱 製 紙 株 式 會 社
扉 用 紙 神 崎 製 紙 株 式 會 社

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

野上彌生子集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

海神丸……………五

茶料理……………三

大石良雄……………四

若い息子……………七

狐……………一五

笛……………四一

作品解説……………平野 謙 三六

野上彌生子入門……………瀬沼茂樹 三九

年 譜……………三九

参考文献……………四三

宮本百合子集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

貧しき人々の群……………一五

刻々……………二七

二つの庭……………四六

作品解説……………平野 謙 三六

宮本百合子入門……………瀬沼茂樹 三九

年譜……………四〇

参考文献……………四三

野上彌生子集

、
不刀

心

云
心

る

べ

か

う

に

~~世~~

阿

(お

の

こ

と

は

写系

上

に

お

み

海神丸

十二月二十五日の午前五時、メイン・トップ・スクウナ型六十五噸の海神丸は、東九州の海岸に臨むK港を出帆した。目的地は其處から約九十海里の、日向寄りの海に散在してある二三の島々であつた。島からは、木炭と木材と、それから黒人仲間で五島以上だと云はれる非常に見事な鯛が出る。その他、何か知ら海産物は一年ぢゆう絶えない上に、往復に日數がとれないから、割のよい點では、これ位割のよい航海はなかつた。海神丸の若い船長はそれをよく知つてゐた。彼は阪神方面や中國筋をひと廻りして來た後では、屹度この島の方へ舵を向けた。——島で丁度な積荷がなければ、進んで大隅あたりへのすまでであつた。

今度の航海は、町の問屋筋の大豆を門司から積んで戻つたばかりの後であつた。併しその儘故郷の濱へ歸つて疊の上で正月を待つのは勿體なかつた。まだ四五日は残されてある。島ならば、その間にひと仕事出来る筈であつた。木炭でも材木でもよい。晦日までにかひと船積んで歸つて、正月錢を餘分に取つてやらう。これが彼の計畫であつた。たゞ残念なことは、日が餘りに押し詰まつてゐるので、島の家々の正月の用意は既に誰かの早い船で整へられてゐるに相違なかつた。それで彼はいつも積んで行く酒とか、米とか醬油とか、またその他のちよつとした雜貨類とかを、今度はすべて積まな

いで空船で出掛けた。
寒さは強かつたが、空はよく晴れ、風は追手で、門出の船には申

分のない朝であつた。海神丸は六枚の帆を六枚とも一杯にふくらませ、漸く明るくなつて來た海路を、大きな鳥のやうに軽く飛んだ。船のうちでは四人の乗組員がそれぞれ朝の仕事についてゐた。船長の甥だと云ふ船乗らしくもなく華奢な身體つきのした十七の三吉は、大阪風な、黒いあつしの上に三尺を締め、後甲板の船長室に隣つた小さな炊事場で、朝飯の支度をしてゐた。彼は頭の上の小窓の向うにぴちや／＼してゐる浪をば知らないものの如く、丁度娘が朝の臺所で働いてゐると何んにも變らぬ、平氣な、物馴れた風で、米を炊いだり、味噌をすつたりしてゐた。五郎助はメイン・マストの根元で、同じ服裝で、捻ぢ鉢巻をして、大駄坐をかいたまゝ、鼻唄をうたひながら、船具の繕ひ物をしてゐた。八藏は舵を取つてゐた。この二人の若者はどちらも四つ五つ三吉より年上で身體も大きく、頭丈であつた。殊に舵を掴んだ八藏の太い眞つ黒な毛深い腕ぶしは、寄港地の居酒屋で、幾らか酔狂の癖のある彼が酔つて相手かまはず振り廻すときの強い拳を偲ばすに十分であつた。而して五郎助が船乗らしい亂暴さと共に、何處か抜けた様なところの見えるのと反對に、彼は一癖ありげな利かぬ顔をしてゐた。船長は今起きたばかりで、自分の部屋にゐた。それは入口が板敷になつた長四疊の細長い小部屋で、正面には一つの粗末な寢臺が置いてあり、その下は布團入と小さい簞笥になつてゐた。それつきりで、部屋の中には何んにもなく、きちんと清潔に片附いてゐたが、たゞ隣りの船員室に面した板壁の上に、大事な二つの小さい棚が吊つてあつた。一つの棚は海圖や、コンパスや、バロメーターや、磁石や、航海日誌や、その他一かどの船員の部屋になら誰の部屋にも屹度ある筈の品物が、安物ながら皆揃つて並べられてあつた。またその棚のすぐ左手の壁には丙種運轉手としての町の水上警察署の認可證の木札が、小谷龜五郎と云ふ彼の名前と、本籍と生年月日——それに依ると彼はまだ四十になつてゐなかつた——を記した面を裏にして釘で打ちつけられてあつた。

今一つの、寢臺に近い方の棚は彼等の仲間が守護神として崇めてゐる金比羅様の神棚であつた。もう御燈明がともつてゐた。その灯は、昨日出帆前に供へたばかりの青々とした榊や、小さい御酒德利や、紅白の御幣の間で淨らかに瞬いてゐた。頼て船長はその棚の下に坐り、潮風に染まつた大きな荒い掌でばち／＼と拍手を打ちながら、彼の毎朝の拜みをあげ始めた。彼は今度の航海の無事を祈つた。鳥々の積荷が計畫通りに行つて、よい正月錢の取れるやうにと祈つた。また陸に残してある家に就いて——家には年取つた両親と、數年前に結婚してまだ子供のない妻があつた——祈ることも忘れなかつた。彼は彼等の仲間の傳統的な強い信仰を持つてゐた。氣紛れなあの風と、一寸としたことにも直ぐ怒つて狂ひ立つ波を相手に暮らす自分等の渡世で、神様の力より外に何が頼みになるものがある。この決定的な信頼は、一枚のお札の前にも、彼等を子供のやうに手を合はさせた。船長はいつまでも熱心に祈り續けた。その眞率なる祈禱の態度は、頭の上の燈明のほかな光と共に、彼の海員らしい荒つばい姿や服装につき纏ふ、平常の感じとは別な、慎ましい、宗教的な空氣でその小部屋を充たした。

どちらかと云ふと彼は小男であつたが、四角な打ち堅めたやうな身體と、ぎよろつとした大きな黒瞳と、黒い角張つた顎とは、精悍な野獸の或者を聯想させた。が、伶俐さうな廣い額や、縮つた下品でない口許は、彼が決して猛々しいばかりの若者でないことを證據立ててゐた。鼻も卑しくはなかつた。さうして髪毛がまつ黒で幾らか縮れてゐるのや、日に焼けた耳から頬へかけての輪郭は何處となく三吉と似てゐた。着物は三吉やその他の若者と同じあつしを着てゐたが、三尺は彼だけは紺金紗の大幅物を縮めてゐた。

「五郎助、おい、昨夜ン棕櫚繩アどきイ積んだンカア?」

船長は頓て部屋を出ると、マストの下の五郎助を目がけて行きなり呼んだ。

「わしや知らん、八が知つちやる。」

五郎助も負けずに怒鳴り返した。

「八、棕櫚繩アどきイ置いたンカ?」

船長は身體を動かさずに顔だけ艦の方へ向けて怒鳴つた。

「表ン下へ入れちある。」

八藏の太いどすの利いた聲が、舵の場所から、怒つたやうに返事をした。が、彼等は本統に怒つてゐるのでも、喧嘩をしてゐるのでもなかつた。それは、平生波の音に打ち消されまいとして話すに馴れた、船乗特有の聲の調子に過ぎなかつた。船長はその棕櫚繩を見ながら船首の方へ歩いて行つた。彼は丁度家の廊下をでも散歩するやうにのつそり／＼歩いた。下が船具の置場になつてゐる、船首の艀口に達した時、その四角の穴に身をかどめる前に、彼は足をジップ帆の前に留めて、沖のぼううつと紫立つた水平線の上になつたと目を据ゑてゐた。

「今日も西風が強いわい。」

彼はひとり言を云つた。

その内に三吉の手で出来上つた朝飯が、船での唯一の廣間である、船長室の隣りの船員室に運び込まれた。三吉は甲板に飛び出して、一人一人に怒鳴つて觸れ廻つた。

「おツさん、飯が出来たで。——五郎助、飯ウ食はんか?」

併し彼は二人を待たないで、自分だけ先にはじめた。さうして船乗仲間の自慢である沖の潮で炊いた味のよい飯を——彼等は陸の上の飯は水臭くて食へないと云ふ——大きな飯茶碗に山盛りによそつて、さも甘さうに、手ばしこく掻き込んだ。彼は八藏に代つてやらなければならぬのであつた。それ故、船長と五郎助が入つて來て、やつと一杯の茶碗を空にするかしないうち、彼は食ひ度だけの飯を食ひ、吸ひ度だけの味噌汁を吸つて、もう立ち上つてゐた。さうして戸の中から叫びながら甲板に飛び出た。

「八、さあ代るぞ。飯ウ食うチ來い。」

海にはもうあらゆる種類の船が朝日にきらめいて浮んでゐた。夜

釣の船は一晩ちゆう釣りためた獲物を町の朝市にかけるために、大急ぎで沖から漕ぎ戻つてゐた。反對に今からぼつ／＼漕ぎ出して、遠くの漁場で大物をねらはうとする漁船もあつた。その他年寄や、かみさんや、子供や、取り分け大勢の娘たちを船一杯盛り上げるほど積んで——實際娘たちは、大きな粉袋や海草類の束の上にまで、ピラミッド形に乗つてゐた——漕いで來る大傳馬が幾艘もあつた。これはその海灣の左右の岸に並んでゐる漁村の部落部落から、町をさして出掛けて行く正月用の買物船であつた。——町は丁度沖を斜に受けて、海が圓く狹まつた奥に開けてゐた。彼等の船は見るからに陽氣でにぎやかであつた。殊に娘たちは、買物の話や正月の遊びの楽しい計畫をべちや／＼喋り立てては、絶えずかけ構ひのない高笑ひを波に響かしてゐた。艀は大抵誰かの夫か息子や漕いでゐた。中には女ばかりで交る交る立派に漕ぐ船もあつた。

三吉はもう若い女の聲が耳につかぬ年頃ではなかつたので、これ等のにぎやかな笑ひ聲が聞こえる度に、舵を握みながらその方の船に目を注いだ。何浦、何村の船だと云ふことがすぐ見分けられた。

一二の見知り越の船ともすれ違つた。

「海神丸、何處イ行くンか？」

「島ぢや。」

「早う戻つち來い。もう正月だぞ！」

彼等は人々が町の往來で行き逢つた時と同じやうに、自由に海の上でも挨拶を投げ合つた。三吉は、向うの船の娘たちが一齊に此方を見てゐたので、常よりも一層大きく、不自然に怒鳴り返した。さうして舵をぎ／＼と握り締めた。

同じ濱の友達の釣船にも出逢つた。

「漁はどうぢや？」

「ちつたア釣つた。」

「一こん投げンか？」

「よッしや！」

艀に廻つてゐた若者が船を漕ぎ寄せると、胴の間にゐたもう一人の方が、生洲から二匹の魚を掴み出して抛りつけた。三吉が舵機から驅け出した時には、海神丸の甲板には、青い大鰭が銀色の腹を返してぴち／＼躍つてゐた。一尾は、丁度飯をすまして部屋から首を出した五郎助が、飛びついて捕へた。

「こいつが二匹ありや、晝は御馳走が食へるぞ！」

彼は魚を掴んだまゝ、大きな馬頭走をにた／＼させて笑つた。

が、四五時間たつて船が外海に出きつてしまふと、斯んな人間臭い光景は悉く彼等の周圍から消え失せてしまつた。見渡す限り今はもう太陽と大空と海とより外にはなかつた。それと共に、これまでは單に船の横波でぴち／＼舌打をしたり、舳にぶつ突かつてぶざけたり、舳を持ちあげて騒いで見たり、いたづら／＼兒らしい惡戯を續けてゐたに過ぎなかつた波が、急に裏切者のやうに態度を變へ、狂暴な姿で襲ひかゝつた。高さは、五六十米突のタンク以下ではなかつた。そのタンクが幾百と繋がつて、非常に長さになつて、一齊に轉がつて來る。而して船に近づくに従つて、脊伸びをして、膨れて、膨脹の頂點で、一瞬間、蛇が鎌首をもたげたやうな姿勢で、きつと身構へをしたかと思ふと、どど／＼と叫んで船を目がけて雪崩れ落ちた。色も朝の落ちついた群青は全然失はれて、赤黒くどよみ、濁つて來た。——日向灘に近づいたのであつた。

その時分から風も變つた。今までの北西が眞西になつた。それが非常に勢で吹き募つて、波と競争で船を弄び出した。

「ちえッ、とんだお客様ぢや！」

海神丸の若者たちは舌打をして忌々しがつた。彼等は波なら大抵までは平氣であつた。どんなに狂ひ廻つても、甲板の下まで怒鳴り込んでも、結局波は根のない空騒ぎ屋で、船員たちの胃の腑を早く空にする位が落だとは高はく／＼つてゐるが、風だけは決してさうは行かなかつた。さうしてこの海の暴君に仕へる方法は、捌巧な家來が人間の暴君に仕へる態度を、その儘學ぶより外に仕方のないことを

知つてゐた。それは、抵抗せぬことであつた。怒るだけ怒らせておくことであつた。而して幾らかでもその怒をよい方に利用することであつた。海神丸は六枚の帆をそれ／＼巧みに加減することに依つて、なるたけ軽くその暴威を受けようとした。けれども風は終日力を弱めなかつた。夜に入つて少し落着いたかと思ふ時には、船は航路から遠く東の方へ流されてゐた。

「えれえ目に逢うたなあ！ 本統なんもう今時は島エついちよる頃ぢやあに。」

「さうとも。この調子ぢや明日もどげんもんかな？」

「吹きたけれや吹けぢや！」

晩飯をすました後の船室で、かすかなカンテラの光に照らされながら、三人の若者はのんきに寝ころんでゐた。追手が續けば十時間に亘りつづける島も、運が悪ければ三日や四日かゝることは珍しくなかつたので、一日流された位、氣にもかけなかつた。彼等は丁度陸の家で爐を圍んで話すやうな調子で話し込んだ。五郎助が、一番多く馬鹿話をした。八藏はむつちりして、をかしくもないと云ふ風をしてゐながら、猥らな話になると、達磨のやうな鬚面をにやりとさせ、目をぎよろつかせた。島のお婆おばんとこの椿餅ちんぺいの話も出た。が、重に島の女の話が多かつた。そのことだけは三吉にはすべて未知の世界であつた。それだけ初はつたな好奇心をそゝられるのを、彼はまだ汚れぬ若者の氣恥かしさで抑へて、わざと船側の方へ顔を向けて聞かぬふりをしてゐた。五郎助がそれを冷やかすと、三吉は急に小犬のやうに飛び起き、顔をまつ赤にしながら、五郎助の胸にむしやぶりついた。

その間、舵機の前には船長が坐つてゐた。彼はすぐれた調馬師が馬の手綱を取る時の熟練でしつかり舵を握み、實驗室の科學者の冷静と注意で、深く空と海を見守つてゐた。月はないが星の美しい夜で、空はその光で一面に白い粉を吹いたやうな影を漂はせてゐた。そのために、まだ晝の怒を収めないで膨れた海は、一層もの凄く眞

つ黒に見えた。時々、寒い木枯ふくが、二本の帆柱と三枚の帆布の間を縫つて、鋭い、悲しげな叫び聲をあげる度に、星は黒い海の上で一齊にきら／＼し、或る怖ろしい意味を暗示するかの如く瞬いた。船長は船乗だけが持つ、獨得な、遠見の利く目で、遙かに水平線と思はれるあたりを熱心に探つた。その線の上の西に面した一點に、ぼうつと彗星の尾を引いたやうな輝の現はれてゐるのを見つけた時、彼は明日もまた西風の強いことを覺悟した。

彼の觀測は誤らなかつた。夜が明けると風は昨日と同じ進路で、しかも昨日に倍する激しい勢で吹き出した。同時に船は夜の間に幾らか取り戻しかけてゐた航路から、瞬に間に押し返され、再び東へ東へと流され初めた。どうすることも出来なかつた。怖ろしい風力は、船員からすべての帆に對する操縱の技巧を奪つてしまつた。六枚の帆は、丁度悪い者に脅かされた子供の群のやうに、てんでにあわてたり、騒いだり、身悶みもえて叫んだりした。彼等は何度も危くなつた。それを皆んなで固まつたり、ほぐれたりして遁げ廻つた。けれども終に大きな手は彼等に届いた。船首のジブ帆がまつ先に吹き飛ばされた。帆柱からぎり取られて、まつ黒な大洋に散つて行つた時、それは一片の小さな屑以上には見えなかつた。二時間の後には、メイン・マストに張つた一番大きな帆が飛んだ。夕方には再び船首のステイ帆がなくなつた。暴風は夜に入つても止まなかつた。

この時分から船長はひそかに最初の計畫を變へてゐた。彼はこの後風が凪ないだとしても、島へ後戻りをするよりは、土佐へ着けた方が得だと思つた。鰐うなぎ節にしろ、木材にしろ、其處まで行けば、積荷に不足する筈はない。明日にも風が變つたら、一二日の内に土佐灣の東の半島に辿り着くことはむづかしくなからうと信じられた。ただ正月の雑煮餅を食ひ損なふ若者たちの失望を思ふと、可哀想でもあつたので、彼は不斷よりは氣軽く、餘計な冗談口を利いたりした。

「五郎助、今度歸んぢ見い。道頓堀をなごかん手紙が來ちよるぞ。おれん天眼通ぢ當てたンぢやけん、間違ひはねえわい。」
 「八もこれチ中々口聞きぢや。今度一村會議員にでん出るがい。」
 「おれが五郎助と一緒に運動しちやらうのう。」

「おい、三吉、珊瑚樹サンゴジュウお土産みやげ持つち歸なうと思ふな、明日かン海うみン底そこう見張つちよれ。此處ここン近所は一面の珊瑚樹林ぞ。」

斯んな調子であつた。一體に無口で、それが自然の貫目になつてゐる彼も、場合で碎けると、誰も及ばぬ愛嬌と頓智を表はした。

幾らか鬱ふさぎ氣味になつてゐた三吉も、彼の斯んな言葉ことばを聞くと、平常の笑ひ顔をとり返した。五郎助も馬鹿のやうににや／＼した。

たゞ八藏だけは佛頂面をしたまゝに、こりともしなかつた。絶えず忌忌しさに、吹きめくる風と、果てなく暴れた海と、物凄ものごいぢぎれ雲の飛ぶ大空を交る／＼眺めてゐた。

四日目の朝になると風は北に變つてしまつた。これは土佐方面にかけた船長の希望を全然打ち挫いたものであつた。ひどく寒くなつて、一面灰色にかき曇つた空からは、時々霞あられが降つて來た。

「何ちふ天氣ぢや、こりや、霞あられまぢ降りくさつち！」

八藏は舵を握みながら、人でも怒鳴りつけるやうな聲を出してぶり／＼怒つた。彼はこの三四日の思ま／＼しい天氣に對する無しや苦しやを、飛んでもないその霞におつかふせたのであつた。夜は船長の好みで、ほんの少しばかりあつたアメリカン粉をこねて、熱い團子汁が出來た。

「この鹽梅しほめぢや、うちの方は雪ぢやのう。」

彼等は茶碗をふう／＼吹きながら、二言三言故郷の話をした。三日たてば元日だと思つたけれども、誰も長くその話題に留まるものはなかつた。船に乗つた以上、船より外に家はない。——船乗仲間ふねりなのこの信條を少しでも亂す話は、殊に斯う云ふ場合には避けなければならぬ、と云ふことを、彼等は殆んど本能的に知つて居た。八藏さへ幾ら不平顔はしてもそれだけは破らなかつた。明けの日は寒

さは幾分和らいだが、その代り空は一層險惡に曇り、波が氣狂ひじみて高くなつて來た。海はもう海ではなかつた。長い連峰と、底のない谷と、鋭い頂上と、山の脊と鞍部とが入り亂れた。而かも恐ろしく龐大な山麓帶さんふくたいに一變して見えた。その峯のつちに攀はち登る時、船は殆んど九十度に近い角度に傾いて躍り、落ちる時は迂り板から迂る子供こどものやうに、まづ逆様に深い谷に轉げ込んだ。それを見ると厚い眞つ青な水の壁は、四方八方から崩れ落ち、その船を巻き込もうとする。船は巻き込まれまいとして、身をもがいて争ふ。途端に噴煙のやうな潮の柱が、舷の眞つ下から湧き立ち、船は危く救はれたと思ふと、それはたゞ第二の峯の鞍部さんぶに乗りつけただけのことであつた。船は新たに頂上まで突き上げられる。また迂り落ちる。この轉落と昇騰は、目まぐるしい速度で繰り返された。而してその度に彼等の目の前には二つの相異なる水平線が現はれ、まづ白い水沫の外で相交錯した。一つは頭の上にあつた。今一つは足の下にあつた。

五郎助と八藏は舵にしがみついてゐた。彼等は波に浚はれないやうに、お互ひの身體をつないで、その綱をまた側の碇いかりに縛りつけてゐた。彼等は雨天用の合羽かっぱを着てゐたにも拘はらず、それでも全身づぶ濡れになつてゐた。波は何度も彼等の頭の上を飛び越えた。しかも彼等はしよげてはゐなかつた。寧ろこの三四日にない位に活氣づいてゐた。八藏も決して今は不満らしい澁面はしてゐなかつた。彼の鬚面は引きしまつて明るく、目は男らしい勇氣に輝いてゐた。捉へどころもなければ、目にも見えないで、それで彼等を好き自由に翻弄する風に比べれば、波ははつきり正體を現はして挑みかゝるだけ愉快に戦へるのであつた。五郎助の顔さへ一人前の戰士らしく凛々しく見えた。

船長と三吉は、船具を流されぬやうに固めたり、水の侵入を防いだりするのに忙しかつた。波をくゞつて身を動かすだけ、たゞ舵にとりついてゐるよりは危険が多かつた。けれども彼等は八藏や五郎

助の組に劣らず上機嫌に働いた。危険が多ければ多いだけ沈着になり、また素ばしこくなる様にさへ見えた。餘り傾斜の甚だしくなつた船の安定を保つたためと、今一つは三枚の帆を失つて、半分以上奪はれた航行力を償ふために、船首に錨綱を曳かせて潮流の中を流さうとした時には、船長は殆んど怒濤の間に身を逆にして働いた。三吉は船長の腰に結びつけた今一つの綱を、船側の太い鐵の環に縛りつけて、それをしつかり握んでゐた。

「そら來た！　どつこいしよ！」

波が全身におつかぶさる度に船長は噓した。三吉も瀧のやうな水しぶきを浴びながら白い齒を見せて笑つた。綱は終に結びつけられた。今海神丸はその長い角を持つて不思議な鳥のやうに見えた。その鳥が、彼女の胸の下から湧き上る怖ろしい潮の塊まりに突かれ、身を空に反らしてもだえる度に、角は蛇のやうにくねつて躍り上り、腹立たしげに海を叩いた。

波だけならそれでもまだどうにかなつた。けれども、夜明け方からその波に西南の強風が加はつて、残つてゐた前部の廣い帆と、船首の最後の三角帆を吹き飛ばした時には、船長は今度の航海がいよいよ困難に陥つたことを考へさせられた。けれども船がこの儘どうかしてこの境遇に浮んでゐさへすれば、その内には天氣も恢復するだらうし、たとへ不運な風と波が続いて、船は打ち碎かれ、たゞ板子一枚きりになつたとしても、小笠原島通ひの船か、または自分と同じやうに航路を迷ひ出た何處かの船に見出されないと限らない。——否、決してこの船がそれまで淺ましく潰れる筈はない。やつと一昨年船下ろしをしたばかりの新造だ。その上金物でも、木材でも此の等級の船としては贅澤過ぎる位金をかけてあるのだ。——船長はこの點に強い自信をかけてゐた。それ故たゞ警戒を要するのはこれ以上遠く行かないことであつた。決して日本の領海を離れないやうにする事であつた。それに就いて最も怖ろしいのは、今吹き出した風であつた。若しこの風がこの儘の勢で二三日も續いて、船

がそれに乗つて走つたとしたならば、彼等はどこの海の果へ吹きやられてしまふか分らない。でなければ顛覆してしまふに極まつてゐる。——

「三吉、鋸を持つて來い。五郎助も來い。」

この心配が船長に最後の決心をさせた。船員室の中でやつと一と息入れてゐた二人の若者は、彼の叫聲でまた立ち上つた。彼等は船長と一緒に身體を結びつけた。斯うして三人で甲板に出ると、船長はメイン・マストの附け根を三吉の渡した鋸で甲板とすれ／＼のところから挽きはじめた。彼はこれ等の不幸な作業をちつとも悲しむ風もなければ、周章でた様子もなく、丁度木挽が小屋で木を挽く様な態度で行つた。倒れかけた帆柱は三吉と五郎助で受留めた。頂上に接いであつたトップ・マストは、三角の小さいトップ・帆と共に取り外づして大事に仕舞ひ込んだ。本統を云ふと、船長は前部の今一本の帆柱をも切りたかつたのであつたが、それだけは思ひ留まつた。若し天氣が直つて、遠くに汽船の煙でも見えた場合には、その柱を信號臺として使ふ必要があつたから。

夜が明けると珍しく南風になつて、波の高い割に風は風いで來た。船長は昨日大事に取りはづしておいたトップ・帆を前部の帆柱の上につけると共に、船首に曳かせてあつた錨綱を引きあげ、北に向つて幾分でも正しい進路を極めようとした。けれどもどこまでも運が悪かつた。午後になると、風は西北の暴風に變じ、その上凄まじい雨が土砂降り而降つて來た。これは三種類の敵が一時に襲ひかゝつたやうなものであつた。風の荒らし残した物は波が荒らした。波の手の届かぬところは雨が引受けた。色んなものが洗ひ流された。船首に置いてあつて、今日までどうにか無事であつた一樽の澤庵漬も、その日の波に没はれた。が何よりの打撃は、前櫓の頂にとり付けたトップ・帆が終に吹き飛ばされたことであつた。これで船には一枚の帆もないことになつた。斯うして海神丸はたゞ一本の帆柱を持つのみで、薄鉄板一枚を水に浮べたと何にも變らない、無能な、純

然たる漂流船となつてたゞよひ初めた。

その夜、三吉は米櫃の米がもう後一斗とは残されてゐないことを叔父に報告した。

「よし！ そんな明日日かん粥にしよ。」

船長のこの命令は八藏の激しい反對を買つた。

「今えなつち、そげん物う食うちたまるか！」

彼は斯う叫んだ。今一度しげに逢へば到底勘かる見込みはない。

その上この天氣模様ではいつ何時暴れ出さないと限らないのに、米を食延ばして何を待たうと云ふのか。どうせ死ぬものなら出来るだけ旨い飯を食つて死なう。今の場合それがせてもの樂しみだ。

人間の樂しみと云ふ樂しみから隔離された、さうしていつ死ぬか分らない自分たちの、たつた一つの望みはそれのみだ。

「のう、五郎助、さうぢやねえか？」

「さうともよ。粥とにんじんはおれン一番好かんもンぢや。」

その好かぬものを食はさうと云ふ人より、好きなものを食はうと誘ふ人に同意するのは、この馬鹿に取つては寧ろ當然すぎることであつた。

「五郎助われまぢ何ちふこツちや、そげん極道口ウきいチ濟むと思ふのか？」

船長から斯う睨みつけられると、五郎助は女の子が叱られたやうに顔を赤くして、それで憫みを乞ふやうにやゝした。が、八藏はどこまでも腰が强かつた。

「何がなんでン、死ぬ時イお粥腹ぢや死にたうねえケンな。」

彼は昂然として云ひ放つた。

「たつた七八日海の上をぶらついたチ、八、われやもう死ぬ時のことまぢ考へちよるのか？ けた糞ン惡リイ！ 何ちふ馬鹿たンぢや！ それチ船乗面が出来た話か！」

船長は若者の氣先をへし折る積りで、わざと嚴めしく罵倒した。最後の一句は八藏に取つても一番痛いところを衝かれた筈であつ

た。けれども彼は黙りはしなかつた。

「瘡我慢を張つたチ何イなるか？ こげんしけイ出逢うち、帆ぢやン、マストぢやン切つチしまうチ、その上何處とも分らん海まぢ流れチ來チ、何んば船乗でン生きちよられる道理はねえ。わしにやもうちやんと胸のりがしちよる。」

「それが臆病神の取り附いちよる證據ぢや。八、胸イ手を當てチ、ゆう考へチ見い。おれなぞ、どげん目に逢うたチ死にやせんぞ。金比羅様アついチござると云ふ氣ヂをるケン心丈夫なもんぢや。粥をすゝらうが、水を飲まうが、よしんばこの船が叩きこはされチ板子一枚にならうが、ちつと辛抱しチ待つちよらにやならん。短氣を起しチ無茶ウすりや、何んぼう金比羅様が助けうツ思うたチ、助かる前に自分たちぢ身を滅ぼしチしまふばツかりぢや。助かる命も助からんわけイなる。そげん馬鹿げたこたアおれにや出來ん！」

船長の言葉には強い信仰と飽くまで生きようとする者の烈しい願望が燃えてゐた。その話に一番打たれたのは、一番年の若い三吉であつた。彼の、ともすれば怯えようとする心は明るくなり、自分の叔父に對する新たな信頼と、一種の英雄崇拜に似た感激で、愉快にさへなつた。同時にその甥である自分が決して弱音を吹いたり、自暴自棄の心を起したりしてはならないと云ふ自尊心が、彼を雄々しく、また事實以上に落着いて振舞はせた。五郎助でさへも船長の言葉を成る程とは聞いてゐるらしかつた。たゞ八藏だけは最後まで主張を枉げなかつた。

「理窟ウ並ぶりや限りやねえ。わしやたゞ粥は食はんチ云ふだけぢや。」

彼等は夕飯をすましたばかりで、皆船室に集まつてゐた。常の航海なら、その部屋は毎晩彼等の娛樂室になつて、のんきな笑話をしたり、船乗仲間の流行歌をうたつたり、時にはまた五郎助の下手な義太夫がはじまつて、皆んなに腹を抱へさしたりするところであつた。今度でも初めの一二日は同じ状態が續いてゐた。けれども不運

な天候が長引くに従つて、その部屋の夜はだん／＼淋しく、陰鬱なものに變つて行つた。船長は今後も食後三十分とは落着いてゐないで、直ぐ隣の自分の部屋へ引き上げた。後に残つた若者たちにも歌ふ餘裕はなかつた。話しも多くはしなかつた。天井から吊された角燈の暗い光の下で横になつたり、船具に凭つ／＼たり、また一人ぼつ／＼と跼坐をかいたりしたまゝ、三人が三人とも黙り込み、めい／＼の思ひに耽つてゐた。三吉や五郎助は、それでも頓ては普通の健全な眠に入ることが出来たが、八藏はいつまでも目をぎ／＼つかせてゐた。或るいらしたしい悔恨と、癒やされぬ不平がその眼を邪魔してゐた。

「馬鹿らしい！ 彼奴の辯口に引つか／＼チ飛んだ目を見ちよる。」彼は家畜のやうに鼻を鳴らして怒つた。——彼奴と云ふのは船長のことであつた。

一切の原因は、八藏が本來海神丸の乗組員ではなく、臨時雇の船乗だと云ふことにあつた。彼は隣村の者で、海神丸に乗り込んだのも、船がこの前門司に大豆を積みに行つた時からであつた。彼は今年はもうそれつきりで船を下りて、家で年越酒を飲み、搦ぎ立ての正月餅をたらふく食ふのを楽しんでゐた。それを船長が無理に引つ張り出したのであつた。

「年寄や女子供ぢやあるめえし、今かン墟ばたチ正月ウ待つちふこつがあるか。人かル笑はれうぞ。さあ、もう一遍行ツち來う。島な／＼ほんの二三日ぢや。大阪船でン朝鮮船でンまだ一艘も戻つちよりやせんぢやねえか。あんなが戻るまぢにや、こつちも戻られる。正月錢は半文でン多い方がよからうが。」

八藏は一旦坐つた家の墟傍を不承無精に立ち上つた。あの時何故頭張つて陸に留まらなかつたか。——それを思ふと彼は腹立たしくてならないのであつた。

「ふん、飛んだ正月錢ぢや。冥途の渡し賃にもなりやせん。」彼の荒い執念深い心には、死の恐怖よりも、寧ろこの忌々しさの

方が先立つて働いた。而してそれが彼の態度をだん／＼依怙地に、圖太くして行つた。船長にも憚らず突つか／＼つた。——粥の問題はその一例に過ぎなかつた。

船長は彼の心持の變化を十分知つてゐたので、子飼の若者なら煩悩の一つもひつぱたかたないではおかぬところを、彼には我慢した。この騒の内々で醜い内輪喧嘩でもあるまいと思ふのであつた。たゞ今夜の態度だけには耐へかねた。それで彼は部屋を出る時厳しい聲で三吉に命令した。

「三吉、八が食はんル食はんでン遠慮は要らん。明日ン朝かン屹度粥を炊けや。分つたか？」

ドアを開けて自分の部屋へ入らうとした時、彼はふと或る事に思ひつた。餘つ程引き返して、三吉を呼んで注意を與へようかと思つた。けれども自分ながら餘りに卑しい想像に恥ぢてその儘にした。

夜が明けた。彼は矢張り手を盡さなかつたのを後悔することになつた。八藏はその朝に限つて一人で先に起きて、自分で飯炊をした。三吉や五郎助が目覚めた時には、針のやうな堅い飯が三升釜に一杯盛り上がるほど炊かれてあつた。

併し粥を炊かうが飯を炊かうが、どちらにしても數日の後には彼等は何處を探しても一粒の米を見ることは出来なかつた。ほんの島まで行く積りであつたので、初めから多くも用意はしてゐなかつた。それでも米は一俵近くあり、他には味噌が八貫ばかりと、里芋や大根や、菜つば類が一と呌と、門司の食ひ残しの澤庵が一樽——、波に浚はれたもの、——なほまた金比羅様のお神酒と云ふ名でいつも少しづつ持ち込むことになつてゐる、彼等の晩の楽しみ酒が二升足らずあつた。米の盡きた後は、彼等は三度三度味噌汁に里芋を入れて啜つた。

今度は水が乏しくなつて來た。雨は最後の暴風雨以後はもう一度も降らなかつた。而して出来るだけ節約したにも拘らず終に斷水の水

日が来た。もう半分飢餓状態になつた彼等の咽喉には潮は通らなかつた。それは食道の乾びた粘膜を刺戟して、針で突き刺されるやうな疼痛を與へた。彼等は釜で煮たてて、一種の蒸溜法に依つて、せめて少しの水をでも手に入れようとしたが、それも成功しなかつた。その上天氣は順調に復して、毎日青い空が續き、風もなく、波も穏やかで、暖かでもあつた。それだけ又、彼等にはいつ雨が待ち受けられるか見當がつかかなかつた。

この時分から、船長は強い覺悟をした。若し今度の遭難が船乗としての自分の受けなければならぬ運命であるならば、悦んで受けてもよい。兄たちも皆んな海で死んだことだ。——彼の兄は朝鮮沖に漁に出たまゝ行方不明になつた。叔父は日露戦争の時御用船に乗つてゐて、その船と共に沈んだ。——けれども、いつ死ぬとしても、せめて末期の水だけは飲んで死に度い。自分は兎に角として、あの若者たちにそれだけは十分飲ませた上で死なせ度い。彼はこれをこの頃の金比羅様のお祈りに入れてゐた。

すると、一と晩夢を見た。彼の前には象頭山の青々とした山が聳えて、木立の間からは琴平神宮の莊嚴な宮居がちら／＼透いて見えた。丁度中腹の噴水のあるあたりの景色が、殊にはつきりと見えた。噴水には水が涸れてゐた。此處にも水がないのだと思ひながら船長が悲しんで佇んでゐると、何處からともなく一つの聲があつて、

「水はあるぞ。心配することはねえ。腹一杯飲ましちやるから待つちよれ。ほら、この通りだ。」

と叫んだかと思ふと、涸れた噴水から、さつと一筋の水が噴き出し、見るまにそれは瀧のやうに四方八方に迸つた。船長は餘りの嬉しさに我を忘れて駆け寄らうとすると目が覺めた。まだ暗かつた。彼はこれが若しかしたら神様のお告げと云ふものではあるまいか、と思ひながら、床の中で夜の明けるのを待つた。何んとなくよい事がありさうな氣がしてならなかつた。

が、明け放れた朝は近頃にもました晴天で、何處を探しても雲の影一つ見えなかつた。これでどうして雨の降つて来る筈があらう。

——船長はすっかり失望した。彼は昨夜の頼もしい夢の話を口にする勇氣さへなかつた。さうして泣き出したいほど落膽して、さう云ふ場合にはその表情を他の者に見せぬために彼がいつもするやうに、部屋に閉ぢこもつて寢臺に打ち倒れてゐた。併し彼はまだ諦めきれなかつた。それで時々甲板に出ては、目を八方にくぼり、空模様を窺つた。

丁度午後の三時と思ふ頃であつた。——船の時計は、八角時計も、自分の懷中時計も波をかぶつて錆びたり、船體の動搖で針が留まつたりして利かなくなつて以來、船長はコンパスで太陽の位置を計つては、僅かに時間の見當をつけてゐた。——北の空に當つて一滴の墨汁を落したほどの小さい點が現はれた。彼の水の底まで探り馴れた目は、譯なくそれを見つけ出した。彼は直ぐ雙眼鏡を持ち出して一心にその一點をねらひ詰めた。同時に餘りの嬉しさに大聲をあげて叫んだ。

「見ゆるぞ！——皆んな來うい。見ゆるぞ！」

すべての用事を失つて、今は毎日甲板に立つては當途のない船と島を探すのを仕事にしてゐた若者たちは、この聲に驚いて彼の周りに駆け寄つた。

「島か？」

「船か？」

彼等は興奮して口々にわめいた。

「雲ぢや、雨雲ぢや！ 雨が降るぞ、雨が降るぞ！」

船長は殆んど我を忘れてゐた。若者たちはもうその時には彼から雙眼鏡を借りる必要はなかつた。一點の雲は忽ち鷲の翼位に育ち、續いて百疊敷の絨氈ほどに擴がり、その絨氈がまたくる／＼と無限に廣く押し擴げられると見てゐるうちに、天の一方はまつ黒に塗り潰され、太陽は消滅し、それに代つて、風の一軍が空を占領した。そ

れからまだ半時間にもならぬうちに物凄い豪雨がやつて来た。船長をはじめ若者たちはこの悦びにすべての苦勞も、悲しみも、不幸も忘れて、瀧のやうな雨の中を躍り舞ひながら、水を集めた。もちろん飲みたいだけぐぐと飲んだ。夕方雨が上つた頃には、彼等は七八升の米研ぎ桶一つに、一斗入の醬油の空樽二つに、四斗入の荷^カ負^ヘひ桶^ツ荷^カに、一升入の徳利三つに、その他船内にある容器と云ふ容器に、悉く水を湛へることが出来た。

その後で船長は彼等に自分の昨夜の夢の話をした。

「斯う云ふ不思議があつち見りや、まあ氣を落しちやならんぞ。金比羅様は矢張りおれたちのこつウ心配しチ下さるのぢやけんのか！ 有難う思うチ、皆んな信心をしチ呉りい。」

彼は嚴肅な調子で、諭すやうに、また頼むやうに云つた、若者たちは感動した。八藏までが殊勝に頭を垂れて聞いた。

けれども若者たちは、この感動を長く持ち續けることはむづかしかつた。水が豊富になつて彼等の久しい望みが遂げられ、その上いつでも飲み度だけ飲まれると云ふことになると、神に對する感謝も信念もいつとなしに消え、彼等の心はまた絶望状態に返つた。一番悪いのは、船の一切の用事から放たれた手と心の紛らしやうがないことであつた。若しお天氣でもいけなければ、それに敵する必要上からでも却つて氣が引きしまつたかも知れなかつた。が、毎日美しい日ばかり續いた。明けても暮れても目に入るものは空つぽの無限に廣い二つの空間——空と海、その間にたゞ一つ大きな鉄のやうに留つてゐる太陽のみであつた。人間や、犬や、猫や、馬や、山や、河や、野原や、草や、樹や鳥や、あらゆる物象があればど豊に充滿してゐた世界は何處に消滅したのか。——彼等は其處から追はれてもう何千年も経つたやうな氣がした。この空虚な思ひと、いつ其處から脱せられるあてもない、荷立たしい怒、悲しみ、嘆き。どの漂流船の船員をも半分氣狂ひにしらないでは置かないその共通の怖ろしい發作が、今海神丸にも襲ひかけてゐた。味噌と里芋の量がだ

ん／＼乏しくなるに従ひ、状態は一層悲劇的場面を増して行つた。

船長は八藏の無謀な飯炊に懲りて以後は、残りの食料を全部自分が保管して毎日の分量だけを、それも極度に切り詰められるだけ切り詰めた量を、その度に三吉に渡すことにした。これが八藏を憤らせた。彼は奪ふことをはじめた。犬のやうに鼻をく／＼させて、當りをつけた場所を根氣よく探し歩いた。味噌の匂ひですぐ嗅ぎつけられた。所詮、船の中ならば、何處に隠してあらうとも、彼には自分の懷を探ると同様に容易なわけであつた。船長は終に自分の部屋に持ち込んだ。自分がその場所を離れる時には三吉に番をさせた。

「畜生、おれたちには、壁ン洗ひ汁ンやうな味噌汁ばかり吸はしちよいちかん、自分たちや後ぢ二人ぢ好きなほど吸うたり、食うたりするに相違ねえ。そげん馬鹿々々しい話があつちたまるか。のう、五郎助。」

「まあ、そげえ云うたチ向うは何んちうたかチ船長さんぢやけん仕様がねえわい。」

五郎助のこの返事は一層彼を怒らせた。

「馬鹿なンが！ 貴様がそげん量見ぢやけん、二人かんおれたちが踏みつけられるのぢや。へん、船長さんが呆れたもんぢや！ たつた二圓五十錢で船長になれるなん、磯ンそだ拾ひでん、一人残らず船長ぢや。」

海神丸は今の海神丸が最初ではなかつた。第一の船は、三年前に大阪に生石灰を積んで行く途中、播磨灘で灰に潮水が入つて、船火事を起して丸焼けになつた。第二の海神丸たる現在の船は、彼の勇氣と熟練を知つてゐる町の間屋筋や、大きな商家が集つて拵へてくれた頼子講の掛金から出来上つたものであつた。一口二圓五十錢の掛金で、彼はほんの名前を連ねる意味で一口しか入つてゐなかつた。八藏の罵倒は之を意味するのであつた。

「何でんいゝ。おりや黙つちやをらん。これかん船長に逢うち、う